

## 事業報告書（令和5年度）

事業名 国際親子クラブ Part 2

団体名 INE 居場所づくりネットワーク 担当者名 大倉美恵

※活動の様子がわかる写真と説明を必ず添付してください。

### 1. 活動内容（日時、場所、参加対象者、人数、内容等）

日時 2024年2月10日（土）10:00～11:30

会場 岡山県生涯学習センター 大研修室

参加対象 外国にルーツのある親子・日本人親子

人数 62人（24家族のうち14家族が外国にルーツのある親子）

参加国・地域 ベトナム、イエメン、オーストラリア、ミャンマー、香港、パレスチナ、  
アフガニスタン、韓国、インドネシア、パキスタン、中国、日本（以上12）

内容 「楽しい科学遊び 空気で遊ぼう～冬しかできない静電気の遊び～」

人と科学の未来館サイピア サイエンスインストラクター 糸山嘉彦先生を講師に  
迎えて国籍を超えて楽しいサイエンスショーを体験した。



風のでどんなものが浮くか



実験にみんな集中



ハラルのお菓子を食べてみる

### 2. ESDの視点

①事業を通じて、参加者にどのような気づきや意識・行動の変容があったか

参加者へのアンケートを実施（回収率 83%）

日本人親子・外国にルーツのある親子別に集計

質問）サイエンスショーは楽しかったか

日本人 楽しかった 90% 外国人 楽しかった 100%

●このように、外国にルーツのある親子は「サイエンスショー」に参加したことが楽しいことだった。なかなか外国の人が日本人のように日本で様々なイベントに参加することは難しく（情報入手、「申込」手続きの難しさ、会場のアクセス、日本人と一緒にへの戸惑い等）があるが、楽しい体験への参加が喜びになっていた。

●子ども達は、講師からの「やりたい人？」の問いかけに、外国にルーツのある子どもは初めから積極的であり、恥ずかしがっていた日本人の子どももだんだんと一緒に列になって順番を待って体験していた。外国にルーツのある子どもの積極性が日本人の子どもへの

呼び水となり、「国籍」に関わらない一緒に楽しい体験へと繋がっていった。

②どのように学び合いを取り入れたか

- 多文化共生は先ずは出会うことである。岡山市内にも多くの外国にルーツのある人がいることを日本人の親子に自然に感じてもらうように楽しい事業とした。
- 外国にルーツのある人には、日本人の集団の中でも臆することなく参加できることを感じてもらえるように座る場所を外国人と日本人が混合になるようにした。
- 楽しさの体験は国籍を超えて感じ合うことができる。お互いにその感性を共有できるように事業題材（サイエンスショー）を決め、途中に参加場面を作った。

③どのような学びと実践を結び付ける工夫を行ったか

- 参加者をグループ分けにし、座っている場所が多国籍となるように名前を胸につけて「見える化」した。
- 休憩時のお菓子に「ハラル」のお菓子を入れて、「ハラル」食品の体験をしてもらったから日本人がたくさん興味を持って試食していた。
- 「サイエンスショー」をプログラムとしたのは、多文化共生の順番として初めは出会うこと、しかもその出会いが「楽しい」感覚を伴うことがその後にとっては必要であるとの理由からだった。出会った時に「嫌だな」との感覚を持ってしまうとそれ以降の関係性がうまくできない。そのため、出会った時に楽しさを共有できるプログラムと、子どもの頃より国籍に関わらない自然な「一体感」が生まれるようにした。

3. 取組の成果（事業計画書に記載した事業の目的・目標をどのように達成できたか。事業を実施してどのような成果があったか。）

「持続可能な社会づくり」

サイエンスショーを通して「一緒に楽しさを感じる」出会いとなった。初めはぎこちない雰囲気もあったが、様々な実験を「見る・体験する」ことで自然に楽しさの共有ができた。ただ、「交流」に関してはもっと工夫が必要だったとの課題は残った。しかし、子どもも大人も驚いたり、感嘆したりという感性は国籍に関わらないことでありこれを体験できた。まず第1段階としての「出会い」としては、会場が熱気にあふれ笑顔が多く見られるなど「国籍」にとらわれない良い出会いの場となった。

◆SDGs 目標4（教育・文化・子ども）

子ども時代の「出会いは」その後の価値観形成の基盤の一つとなる。今回は「楽しい」ことを前面に出して「共に楽しい」ことを体験として感じることであった。講師の声かけで大きな風船をみんなで追いかける際には、国籍など関係なく子ども達は一緒になって笑っていた。

◆SDGs 目標10（格差是正）

今回「ハラル」食品を用意したところ、多くの日本人がそれを食べていた。「ハラル」という言葉は知っていても体験を通すことで国による文化・習慣への理解が進んだ。



◆SDGs 目標 1 1 (まちづくり・防災)

今回外国・地域にルーツのある家族が参加者の半数を超えて、自らが参加申し込みをして参加している。外国人にとって日本人と同等に一緒に活動する機会となった。日本人と一緒に安心して参加できることを積み重ねると外国人をも含めた災害時の「共助力」につながる。

◆SDGs 目標 1 6 (平和と公正・市民参加)

会場にはヒジャブを被った人がいること、「ハラル」食品を体験することなど、多様性を自然に受け入れている様子であり、同じ場面で一緒に驚いたり笑ったりと対等に感性を共有できた。

4. 今後の課題と展望 (事業がどのように岡山地域の ESD の取組と持続可能な社会づくりの発展・継続につながるか)

今後の課題

現在岡山でも外国人の人口が増え、今後外国人労働者の増加が予想されている。日本社会が外国人も含めた持続可能であるためには多様性を理解し受け入れることが必要になる。岡山地域では外国人の存在が「見えにくい」状況であり、労働者問題も起きていた。お互いへの理解と多様性を受け入れることが出来ないでは、日本人、外国人共に課題を抱えて望ましくないままの社会になる懸念が生じる。

展望

岡山地域として ESD の取り組みが進むことで、外国人を取り巻く生きづらさが緩和される。さらに、多様性への理解は外国人にとってだけでなく社会弱者の課題への気付きと理解へとつながっていく。

持続可能な社会作りには「繋がり」が必要であり、このことにより「取り残される人(社会的弱者)」をも巻き込むことができる。

今回の事業は外国にルーツのある人と日本人とので出会いの場であったが、外国人が日本人と対等に社会参画へと進むには段階を追って共に進むことが重要であり、外国人による外部からの視点を日本社会に活かすことで多様な社会構築の一助となる。

また今回の事業で公的な施設を使用したのは、外国人も公共の施設に慣れて欲しかったためである。もっと外国人も日本社会のイベントや施設など社会資源を有効に活用することができれば、市民参加への意欲も生じて社会がより豊かになる。